法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

<対談>来し方……

廣末，保 / 藤田，省三

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
42
(開始ページ / Start Page)
57
(終了ページ / End Page)
76
(発行年 / Year)
1990-03-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019595

〈対談〉

来し方……

廣末　保
藤田省三（法政大学法学部教授）

藤田　広末さんが法政の日文科の教師を退職なさったのは、もう十年も前ですけど、これは、それを記念して、法政の文学部日文科の紀要に……。広末さんの法政・日文科での長年のご苦労に感謝をするということが一つと、それから、お陰様で法政の日文というのは、戦前から法政の中では看板学科だったから、それの戦後のチャンピオンというか代表者の一人である広末さんの功績に、日文学科が謝意を捧げるための記念号なんでしょう。

広末　よくわからないけど、特集号をつくるからと言われたんだけど辞めて十年にもなることだし、テレくさいし、出来るなら辞退したいと申しあげたけれど、あまり我をとおしてもなんだし、それから、ふと、これは僕の追悼号になるんじゃないかという気がしたりしましてね。生きている時に追悼号を出してもらうのもおもしろいなと……。今日は、自分の追悼号だから、僕はあの世からだが、藤田省三さんはこの世にまだいるわけで。

藤田　いえいえ……。

広末　あの世から訪れて、この世の人と閑談するという……（笑い）対談。だから、気楽な気分で勝手なことをしゃべりあえば……。僕は藤田さんに原稿を依頼したことを知らなかったのよ。依頼したということを聞いて、悪いなと……。いろいろ家庭の事情もあるわけで、頼まない方がいいといってたんですよ。

藤田　家庭の事情というと誤解があるので……。

広末　奥さんの身体の具合がよくないし、頼まない方がいいと…

…。そしたら、どういう経緯か、頼んでしまい、その結果、対談をしようというふうに、藤田さんから返事があったというから、じゃ、普段からも話しあってることだし、いつもの調子でやれば雑誌の性格にこだわらない対談ができるかもしれないと……。僕は前に『老いの繰り言』というのを書いたでしょう。『老いの繰り言』を書いて、今度は自分の追悼号に登場するという、そういう順序になってきた。でも、藤田さんには少し元気な発言をしてもらいたいな。

藤田　いやいや、もう元気はないですけど……。原稿を書けと言われたけど、僕は、女房が病気してるし、母親も病院に入ってるので、ちょっとそれは無理だ。僕は第一、字を書くのに手が震える。どの事情をとってもかなわない。それじゃ、広末さんの話を僕が聞き役になろうと……。といっても、しょっちゅう話してるから……。しかし、僕が長年、広末さんと親しくさせていただいてたということを、よく知ってたなと思ったね。

広末　どういう情報なのかな、僕もちょっと意外だった。

藤田　僕は法政の中では、完全にあの世的存在ですからね。神話的人物というと、非常に高級になってしまいますけど、そうじゃなくて高級でない神話的人物ってありうるでしょう。それは神話の定義に反するかもしれないけども、そういうふうな神話の定義のし直しというのは、僕は必要だと思うね。でないと、鬼ババの話とか地獄の話が出てこないことになりますからね。そういう意味で、僕は法政内ではあの世的存在で、幽冥……（笑い）、ユウメイのメイは明らかな方じゃなくて……（笑い）、暗い、冥土の方ですけど…。

広末　でも、たびたび娑婆へ出てきて、みんなを脅かしてるんじゃないの。

藤田　（笑い）。その時に、広末さんがちゃんと話にのってるんだな……。（笑い）、幽霊同士の……。

広末　専任を辞めて十年経つけども、そのあいだ非常勤でお札奉公してきたわけで、それも終る。今日、藤田さんと対話して雑誌に載せればそれで一切お役目御免ということになる。この雑誌は、法政の国文学会というのの機関誌なんですよ。

藤田　国文学会って、あるんですか？

広末　あるんです。

藤田　日本文学科になってるのに、どうして国文学会？

広末　戦前から文学誌要という雑誌があって、近藤忠義さんらが頑張っておられた。その伝統がほそぼそと――ほそぼそといっては悪いですけれども――続いておって、学生なんかも会員で、国文学会というのがあって、その機関誌なんです。卒業生とか、全部そういう人達が参加してるんです。

藤田　やっぱり国史というとおかしいんで、日本史と言った方がいいでしょう。それと同じように、折角、学科の名前が日本文学科といってるのに、どうしてそれを国文学と……。改めなかったのかな。輝ける戦前の伝統はそのままにしておくという……。

広末　僕はあんまり国文学会に対しては何の……。

藤田　固い関係がない……。

広末　（笑い）……その……。

藤田　いやいや、本当の意味で……。

広末　なんのお役にもたってこなかった。だから特集号など、とんでもないことだが、まあしかし、出さないと、後々の人の場合に差し障りがあるのかもしれないですね。そういうことをいうと、なんか非常に、かんぐることになるんだけれども、だいたい何かしゃべると、つい、そういうふうになって……。

藤田　構わんですよ、それは。僕も同じ問題に……。いや、これと全く同じ問題というよりも、法学部の人は僕が退職したからといって、誰も退職記念号を出しますなんて言わんでしょうから、それは人徳というか学徳の違いで、かまわん。

広末　（笑い）。そういうのは慣習の違いという……。

藤田　いやいや、かまわんのですけど、しかし、他の問題で類似のことというのは起こりうるのね。それはちょっと僕も、戦々恐々たる思いがあるわけ。例えば、普通の人が慣習的にやってることに対して、そうではなくて制度的に許された範囲でこうするというふうにすると、それがいろいろなことに差し障りますね。しかし、それはおかしいんで、制度的に規則上決められた通りやった者が、どうして異例でありうるか……。それはちょっとおかしいのか、慣習の方がおかしいのか、どっちかがおかしいんで、どっちかを改めればいいと思うね。

広末　これも差し障りが出てくるかもしれないけども、僕は定年までいなかったけど、例えば定年の六十五歳で辞めても、それを異例であるかのごとくとられるでしょう。

藤田　そうでしょう。それはおかしい。

広末　さらに、変人であるとか、かたくなであるとか……。

藤田　そうそう。あいつは狷介だからとかね。僕なんか狷介。

広末　普通にやれば、そういう変人みたいにとられる。僕なんか、なるべく変人でないように見られたく努力してきてるけれども、そういうことが結果的にはなんか……。だから、普通の常識の通りやってる者がはみ出してるような……、そういう状況ですね。万事、そういうふうになってるんじゃないですかね。まあ、僕はだいたい『老いの繰り言』的なスタイルが身に付いちゃっているから、若い人は嫌がるでしょうが、同年配の人はもっと嫌がるかもしれない。自分が老いてると思わない人がいるわけだから……。

藤田　思いたくないという……（笑い）。

広末　僕は純真に『老いの繰り言』をしてるんだけども、それがまた、厭味になってくるのね。

藤田　簡単に言えば、写実精神さえもなくなったということですね。リアリズム批判というのが一世を風靡したけど、そのリアリズムの精神さえもなくなって、自分が年取った場合には、年取ったという現実から逃げたい一心で、若くありたい、若くありたいってなってるわけでしょ。これはずいぶん変ってるよね。写実精神を含まないシュールリアリズムというのはありえないよね。シュールというのは超えるということだから、なくなっちゃったら、シュールもくそもあったものじゃない。

広末　まあ、年がいくと……、学校を辞めるということは、いろんなものから、もうちょっと身軽になりたいという……。それなのに、折角辞めてて、なお身軽になりたがらない人が、世の中に割と多いんですね。まあ、人それぞれの生き方もあるし、好みもあるだ

ろうから、他人（ひと）を論（あげつら）うよりは、自分のことを論った方がいいでしょうがね。

藤田　それじゃ、そういうふうなところで……。

広末　繰り言というと、どうしても自分の事は棚に上げて、いろいろ不平不満を言いたくなる。不平不満を言うことに対して、僕はかなり自制してきたつもりだけど、この齢になれば、もう、あんまり自制しないで言ってもいいんじゃないかって……。どうせ、老いの繰り言だと思って聞いてもらえばいいから……。そういう気がしてる。

藤田　まあ、記念号らしいから……。

広末　追悼記念号。僕が追悼記念号に出てきて、藤田さんが弔辞を……。偲んでくれるような関係でやればいいじゃない（笑い）。

藤田　やるか。

広末　弔辞というよりも、葬るわけだな。

藤田　手厚くね。

広末　うん、手厚く葬ってください。

藤田　本人がまだこうやって生きてると、いくら幽霊だといっても、なかなか気味の悪いものですよ。僕の知ってる人で、自分の葬式の時の挨拶をテープレコーダーに吹き込んでおいた人がいるんですよ。来た人は気持ち悪かったそうですよ。本人の声で「本日はどうも……」（笑い）。気持ち悪かったらしいよ。これはリアリズムの数学者だったらしいんですけどね。逆手にとって……。

広末　南北も自分が死んだ時の葬式の台本を書いておいた。

藤田　おもしろいけど、かなり意地が悪いですね。

広末　意地が悪い。

藤田　まあまあ、死んだら、みんな偽善的にでも褒め言葉だけをいうわけですから、そこで偽善は許さんぞというわけで……（笑い）。葬式の持ってる美意識性というのは半分ぐらいなくなる……。

広末　偽善でもいいから、褒めてもらいたいんじゃないだろうか。

藤田　ああ、そうか。

広末　いや、そういうもんじゃないの、葬式をやってもらうということからして。

藤田　ということは、追悼号を引き受けたということは、そういうことだから褒めますけども……（笑い）。

広末　結構それで往生できるかもしらん。成仏できるかもしらん。

藤田　僕は割合、死者を褒めるの、うまいのよ。

広末　人を成仏させるのがうまいわけだ。

藤田　鬼になってりゃ、もっと劇的に褒めるんだけど。

広末　僕はだめなんだね。心の中では褒めてるんだけども、口に出ると、褒めておいて最後にどこか落ちが批判になってしまう。悪い癖だが。

藤田　まあ、この癖は直らんでしょうね。

広末　どうしてこうなったのかなあ……。これ、歴史性があるよね。

藤田　いや、もともとそうなんでしょうけど、確かに歴史的変化

はあるよね。表現された限りで言うと、『近松序説』までは、まあ真っ直ぐきてるわけよね。志を新たにしたところから出発して、『元禄文学研究』『近松序説』までは熱気があるんだよね。

広末 ＜蛇怖じず＞というのがあるけど、＜若気の過ち＞みたいなのもあって。

藤田 だけど、若気のない青年というのはいないから、大事なんじゃないですか……。『近松序説』を褒めると、すぐ嫌な顔する……。

広末 嫌だと知ってて褒めるんだ、これは意地悪なんだよ。

藤田 （笑い）。変化は、その後やな。それから……。

広末 それから、もう迷いだしたから、迷路に……。

藤田 わざと迷路をつくったりね。他人が理路整然といってると、それを迷路へ入れたり……。

広末 迷路というと、僕はこの四、五年、学校を辞めてしばらくしてからだけど、しょっちゅう道に迷ってる夢をみるんです。それが、すぐそばに行く目的地があるのに、そこへ行けないんですね。やっぱりまだ、学校を辞めて自由になったようなつもりでいるけども、何か不安が……。その前は、どこかで飲んでて帰ろうと思ったら、靴がない、そういう夢をしきりと見た。それを人に言ったら、そういう夢を見る人はいるらしいね。自分の靴がなくて裸足で帰る。まず、自分の靴がなくなって、履物がなくなって、その次は迷路を彷徨いだしたという……。僕は夢の問題というのはあまり考える方じゃないんだけど、かなり僕の……。

藤田 深層心理ですね。

広末 うん、出てるってわけでしょうね。

藤田 センス・オブ・アライバルというのがあるらしくて、到達感というか、到着感……。E・M、フォースターが――あの人はアレキサンドリアとか、中近東のアラブ圏が好きなんでしょう。インドも好きなんだけども――アラブ圏のイスラムのモスクへ行くと、キリスト教の教会に行ったのと違って、センス・オブ・アライバル（到着感）というのを感ずると……。そういうの、僕は本当にはよくわからないんですけど……。やっぱり到着感というのを持ちたいという意欲があるんじゃない？　あるいは、持てないという……。もう一つは、学校を辞めてというんじゃなくて、行き着く所でないと死ねないということがあるんじゃない？

広末 それはあるでしょうね。その死ねないというのと、到着感というのと関係あると……。

藤田 だから周囲で迷うんじゃない。すぐそばまで行って迷ってるというのは、いまの状態そのものを……（笑い）。

広末 そうでしょうね。夢の中に出てくる場面がつげ義春という漫画家の絵にすごく似てるんだよ。最近、その人の本を人からもらって見たんだけど、すごく似てるんだよ。暗いんだね。しかし、いまは、何をやってもいいみたいな、何をやっても、言葉は悪いけど商売になるような、そういう状態なので、要するに初めから、そこへ到着してるんじゃないかね。今日、来る時、ちょっと推理小説を読んでたら、これは立ち泳ぎしてる状態だ、という表現に出会って、面白いと思った。立ち泳ぎしてて、自分では岸にむかって泳いでいるつもりでいる。あるいは、そこでもう到着しちゃってるみた

いな感じで、ただ沈まないために、せっせと手足を動かしている。岸がどこにも見えないという不安もない。

藤田　行くべき港もない。どこから来たのかだけは、おぼろげに何とか辿れるけれども……。そこが日本人の特徴じゃないのかな。どこから来たかは、だいたいみんなわかってるつもりなのね。これは、ユダヤ人にしてもパレスチナ人にしても、果たして自分はどこから来たのかなんていうのは、わからないというのがあるんじゃないかな……。そうすると、彷徨えるオランダ人じゃないけど、それこそ、行き先もなければ、どこから来たかもわからないという、最も実存的……。日本人の場合には、狭いというのはそこにあるんだね。私小説になるというのは、そこに一つの条件があるんじゃないかと……。

広末　どこから来たかはわかるけど、帰るところがない。帰るところがないというような考えを持つのが、もう古いのかな。いまの人は……。

藤田　いまの人もそうでしょう。帰るところはない。

広末　ないと思って始まってるのかねえ。

藤田　じゃないかねえ、やっぱり……。いや、知りませんけど、大方ね。だから七〇年代の存在だとか、八〇年代の存在だとか、六〇年代の存在だとか……、僕なんかあんまり……。こっちは年取ったから、八〇年代とか六〇年代とかいっても……。五〇年代と六〇年代はうんと変わったよね。確かに社会状態が変わった。だけど、その後は、真っ直ぐ直線だとは思いませんけれども、続いてるよね。ですから、わざと区切りを付けてるんじゃないかと思うくらい。その時その時の情勢の中で、浮かんでるか沈んでるかの違いをひどく問題にするでしょ。僕なんか無理に浮かんでる必要ない。沈んでたって浮かんでたって、走ってたって歩いてたって止まってたって、そんなに変わらないと思いますけどね。そのへんが、泳ぎ主義になる所なんですか、泳ぎのうまさとか下手さとか……。

広末　年代の区切りにこだわらないと何か自分が……。

藤田　アイデンティティが……。

広末　ないというあれがあるんでしょうね。

藤田　でしょうね。自分は八〇年代の存在だとか、そういう……。だから実存感覚としては不徹底なのよ。自分は放り出された一個の石ころと同じ存在だというふうに思うところからしか、現代哲学は出発しなかったし、文学ももちろん出発しなかったわけでしょう。ところが、何年代と自分を同一化するというのは、おかしいと思うね。石ころだと思えというのね。

広末　僕は、だいたいアイデンティティという言葉にアレルギーをおこしてしまう。アイデンティティなんてものがないから、文学とか、何かを表現しようとかするわけでしょう。アイデンティティといったものが、何かすぐそこにあるみたいな……。あれば、もう何もしなくていいじゃない。

藤田　ま、それが現状ですね。……と思いますね。

広末　僕も藤田さんも、会えばおしゃべりばかりしている方かもしれないけれど、この頃の人というのは、ほんとにおしゃべりで……。おしゃべりというのは、よく話すということではなくて、しゃべり散らす、書き散らすという……。昔からみると非常に自由にな

って、いままで言葉を持たなかった連中が、自由にものを……。パフォーマンスとか何だとかいうんで非常に解放されて、言いたいことを言ってるんだという感じになってるようにみえるけど、ふと気が付くと、言いたいことがなくなってるというか、言いたいことに気が付かなくなってるというか、そういう状態なんだと思う。言いたいことがなくなっちゃうと、やっぱりいまみたいなふうな、なんとなく賑やかで騒々しいようなおしゃべりっていう時代が来てしまう。

藤田　檻の中でふざけあってるという……。檻で囲われて安全を確保して貰って、逆にいうと変化に対する感覚、変化を受け止める感覚がないなあ。仕様がないから、六〇年代とか七〇年代とか、十年単位で切ったりするんじゃないのかね。十年単位で、別に事件が起こるわけじゃないからね（笑い）。

広末　まあしかし、日本人というのは、天皇の一生で、歴史を年号でもって区切っていくという習慣があるからなあ……（笑い）。

藤田　広末さんは、法政に何年ですか？　辞めるまで……。

広末　三十三年です。それから十年。

藤田　法政というのは、どの程度、広末さんにとって比重を持ってましたか、正直なところをいって……。

広末　僕は全く非政治的人間だったわけですよ、まあ、昔風の……。だから文学を、どこか片隅で……。それがそこから引きずりだされたってことですね。それは藤田さんの場合もそうかもしれないけども、法政というところは、いろいろありましてね、ささやかだけど政治というか、そういうものを経験したという、それはありますね。学問的には、そういうことをいえるあれじゃないですけど……、法政というのは、よくも悪しくも、研究所があって、そこで論争しながらも、何かを蓄積していくとか……、そういう場所じゃないんですね。これは昔のことだけど、僕らはよく言ったもので、法政というのはボロ教室だけがあって、僕らがいないと学生が集まらないから、仕方なしに教師をやとっている。だから、教室で帽子を廻して、一回毎にお金を貰ってきてもいいんで、そういう学校だったわけですよ。それが、ある程度、学校らしくなってきたのは、どの段階か知らないけど……。結局、法政というのは、非常に殺風景な学校ですよね。

藤田　そこがいいとこだ。

広末　うん。だから自由ではあったね。誰かに遠慮しなくちゃいけないということはなかった。逆に言ったら、三十三年も法政で専任が勤まったというのは、法政だから勤まったかなという気もしますね。

藤田　僕の場合もそうですねえ。ですけど、僕が、広末さんにとって法政がどの程度の比重をもっていたかというふうに伺ったのは、広末さんは元禄文学研究家だと、まあ世間ではいう。ところが一方では広末さんは文学運動にだいたい六〇年代いっぱいぐらいまでは関係してたわけでしょう。そうすると、法政の方は教室へ行って学生に授業をすると……。本式の討論というか、そういうものは、例えば新日本文学会でやるとか……。例えばですよ、それ以外のものがあるかもしれない。日本文学協会はどうであったか知りませんけど……。そういう比重の分配でいくと、例えば『近松序説』

をピークにする元禄文学研究と、「転合書」その他に現れるそれ以後の変化は、新日本文学会なんかの文学運動の中でものを考えていった結果、その変化がでてきたという側面が……。

広末　あります。

藤田　あるでしょう。法政の中だけにいた場合には、そういう変化は果たしてあったか……。

広末　法政の中だけでいたら、僕はいま頃、大著をなしてますね。

藤田　ねえ、そうでしょう。そうすると、それこそ壮大な追悼儀式が必要な存在になってるわけよ（笑い）。

広末　非常に口はばったい言い方をすると、ライフワークの意識なんていうのはもう、そういう文学運動みたいなものの中に入っていった時からなくなりましたね。だから、その時その時、刹那的というのじゃなくて、問題を抱え込んでいるというか、文学史研究におけるあるテーマをたてて、それで例えば近世文学史を一冊書いておこうとか、そういう意識は全然持たなかったね。ただ、それは僕の能力の問題かと思いますけどね。やっぱり僕が歩んだ、いま藤田さんが言ったような過程の中でそうなってきた。それに対しては、全然後悔はしてない。

藤田　それは僕も同じなのね。僕も大著を、完結編というやつを書いていたかもしれないけど、僕が書いたもので、完結編というのはただの一つもないんで、その点は広末さんと同じ。一つは法政だから、そういうことを許してくれたという点もあるでしょう。これが例えば東大だとか、そんなところにいたら、そういうことは許されない。そういう意味で、法政は主たるエネルギーの蓄積場所を法政の中に置かなくてもよろしいという……（笑い）。不在的な存在、存在しない存在ね。不在的な存在を許す自由を与えてた希有な学校じゃないかね。

広末　そうでしょうね。その点では、僕らにとってはあり難かったけど、学校の方からいったら、やや無責任な学校のあり方なんだね。

藤田　……でしょうね。

広末　それは、学校が意図してそうしてたんじゃなくてね。

藤田　そうそう、自然になってるのね。それを、こっちがそう使っただけの話でね。だから、僕らには功績があるわけよ。伝統をつくってあげたわけ、自由の伝統を……（笑い）。あっちは与えるつもりじゃなかったのに……。

広末　僕らは、マイナスを転化したんだねえ。

藤田　それが一つと、もう一つは、広末さんが『近松序説』以後と以前というか、その変化をもたらしたエネルギー源としては、文学運動の方がむしろ法政よりも大きいという、その場合に、文学運動というのはいったいどういうものなのかというのを、広末さんの定義……。だいたい定義が好きな人というのは、定義を一義的にやって、それを他人も認めるべきだというふうになる。それを待ってましたというふうに、広末さんはその定義をひっくり返して、別の定義を繰り出す。そのうちに、相手が混乱してくると……。そんな単純なものじゃなくて、混乱しなければならないのである、その混乱を計画するところに精神の経過というか営みというか、そういう

ふうなものがあるのであるというふうに持っていくのがお得意の人ですから、だからよけい伺うんですけど、文学運動というのを一応定義しないと……。文学運動をスローガンに掲げてた人がいるでしょう。いまでもいるよね。そんな人は極少数でしょうけど……。なんか旗印さえ掲げていれば、それはそれでありうると思ってる物凄いゴリゴリというか……、そんなのいるじゃない。そういうのに対して、いや文学運動というのは、実際はこういうもんだと自分は思うよというのを広末さんは……。

広末　僕、文学運動ということを口にしたことはないような気がするけどね。

藤田　口にしてたんだ、仕様がないよ、これ。

広末　……したかなあ……。本音みたいなことを言っちまえば、例えば、政治と文学だとか、そういう問題がありましたよね。いまもあるでしょうが……。僕にはやっぱり、政治と文学というふうには、文学は切れてないという考え方があるんですよ、原則的だけども……。だけど、それを文学として受け止めるわけね、受け止めて、自分が文学をそこで考えるわけだ。おそらくそういうふうに文学を……。つまり、大学の中にいてアカデミックな研究をしてるというのよりは、はるかにそっちの方が文学を考えてるということがあるんで、それは自ずから僕の文学運動なんですよね。僕の場合は、そういう非常に単純な構造なんですよ。それから、もう一つは、いろんな人間がいて、そういうものを集合していきますね。それは自ずからもう一つの文学運動になるだろう。ただ僕なんかは、もう一つの文学運動の中で、やや異質なタイプだったと思うんですよね。新日本文学会に、なんで僕みたいな人間がいるのか、わけのわからなかったひともかなりいると思うんですよ、初めのうちは。そういうものに組み込まれていってもいいという感じね。ただ組み込んでいった方が、果たしてちゃんとした道をつくっていったかどうかは別だけども……。僕の場合は、それが文学をやってるという実感。そっちの方にあったということですね。文学……、運動……、まあ運動会じゃないからね。文学は。やっぱり抱え込んだ問題は、逆立ちしても間違っても、取り組んでみようという、そういう人間が集まって、一つの方向を出していく……、それが文学運動だと僕は思う。僕の場合、文学運動といっても、自分の文学。だから、さっきのあれでいえば、自分の文学のやり方に非常に近い場所が得られたという……。もっとも、文学運動をやってると広言する相手の方からいうと、お前は近くないというふうに言われるかもしれない、そういう関係だったと思いますね。ただ、僕の場合、その中で理解してくれる人がいた。はっきりいえば、花田清輝さんとか、だから、あそこにおれたともいえる……、いなかったら……。

藤田　だから、法政にもおれたんだし……。いたというよりも、いることを許していただいたし、新日文にもいることを許していただいたような存在であって、つまり組織体というのとはあんまり縁が無いというか、親和性とか何もないのよね。だから、組織体よりはまだ、浮遊している、つまり迷路を迷って到達しないグルグル回りの方が、存在感があるわけでしょう。

広末　存在感……。

藤田　存在感というか、自分の実存に近いという感じが……。

広末　そうですねえ。

藤田　つまり、迷っている状態の方に対して、アイデンティティがあるわけでしょう。

広末　まあ、アイデンティティというか……。

藤田　言えばよ。固定的アイデンティティの持ち主はあまり好きじゃないでしょう。

広末　確かに、法政はいま言ったように、そこにいることを許してもらえたね。それから新日文なんかでも、そうなんだと思うんだけども……。こういう観点でものを言うのをあまり好きじゃないけども、やっぱり法政といっても、どういう人がいたかということになると思う。本人を前にしていうのは変だけども、例えば藤田さんなんかがいてくれたとか……。法政という風通しがいいというか、風ばかりに吹きさらされてるような学校の中だから許されたんだということもあるけど、その中にいるのは具体的な人間でしょう。その人間と出会ったということね。そういうことがなければ、やはり棲息できないですよ。パーソナルな関係をあまり強調したくはないけども、しかし、運動を見てても、やっぱりそういうものがあるのね。そういうものがないと……。だから誰かがいなくなると、自ずからそういう形態が壊れていくという……。それはまずいことかもしれないけども、しかし組織というのは、形骸的な骨組みがあって、そこに入っていれば運動が成り立つというものじゃないでしょう。ただ、日文科の中で、それは誰であったかといわれると困るんですね。この雑誌で、そう言うことをいうのも、これまた困るんですけども……。

藤田　だから、言っとかなくちゃいかんわけで……。それは困るだろうと僕も思いますよ。

広末　だから、自分で言うのはなんだけれど、日文科の中では媒介役……。なんとなくややこしくなった時に。ほんとは我がままな人間だといわれるけども、法政の中では大変控え目でありまして……。嘘をつけという人がいるかもしれないけども。だから、僕が辞めた後、ちょっとまごつくというようなことはあったかもしれませんね。しかも、世代交代というと変だけども、大きく交代していく時期だったでしょう。その時に僕が辞めちゃったでしょう。若い人達のなかには僕のことを、勝手なやつだと……。

藤田　見放して去るとは何事かという……。

広末　人によっては、ヤレヤレホットという……。こういう言い方は甚だまずいけどね。

藤田　いやいや、そういうの全部言った方がいい。それは、この雑誌だから言えることで。

広末　しかし全体としていえば、もし余所の大学なんかへ行ってたら、ほんとに慇懃無札に、上下の差別があって、それで一年に一回ぐらいは紀要かなんかへ、それらしい……。

藤田　麗々しいやつを書くわけでしょう。

広末　論文を書いて、業績をつくっていかないといけないという……。そういうことを考えた場合は、余所の大学とは比較にならないぐらい恵まれておった。

藤田　そうですね。そのお陰で僕なんか、未だに……。

広末　さっきの運動のあれでいったら、業績意識がまずなくなっ

たね。

藤田　そうね、それが一番大きいやね。つまり、文学運動というのを定義すれば、業績意識などというアカデミックな余計ものを、いっさい心の隅々から追放できたという……、できるということよね。

広末　そうですね。それは非常に一貫してますね。

藤田　逆にいうと、問題に真っ直ぐ直面できるわけよね。全身全霊なんていうと大袈裟だけど、問題にね……。政治なんていうものは小さなもので、政治と文学がどうであるかというのは、関係しあってるに決まってるけど、政治それ自身が、根本問題からは後れてるものでしょう。だから、政治というのは必ず問題から後れてる。問題を解決しようとする技術なんだから、問題の方が先にあるに決まってるわけで、問題それ自身と比べたら、政治ははるかに後れてますね。いまの政治だってそうだけど、未だに軍縮あたりでウロウロしてるわけですから、はるかに後れてますよね。だから、政治も文学も後れ……。文学の方が、……まあ詩の世界なんかは、ほとんど無意識に予見的でありえますよね。政治というのは、いかにも予見的であるかのごとく見えながら、実際は常に後れてる。遅れざるをえないものでしょう。だから、政治と文学の関係というのは、一時期問題にしてましたけど、それ自身はどうでもいいんですけど、要するに万人の問題を我が身の問題として直にそこへ行けるという……。業績もつくり、そっちも向きというんじゃ、これはね……。

広末　だから、少し大袈裟な言い方をすると、キザったらしい言い方かもしれないけれど、ある種の無名性みたいなものと芸術の関係を摑まえることができた。それはありますね。業績ということでいうと、何も自分が持たなくてもいいという感じ……。しかし、ほんとは何かをつくらんと、自分もだめですけどね。

藤田　そこが、僕なんかはうまくない。何かをつくらなくてもいいという……。いや、自分の中にはつくらなくちゃ生きていけないけど、表現する必要なんか、もうないんだという……。それはある種の絶望感なんでしょうけど、表現する必要なんかないんだというふうに思ってるね、この頃は。

広末　この頃はでしょう。

藤田　もう十年……。

広末　（笑い）。

藤田　だけど、そういう段階を経て、ここへ到達……、やっぱり到達したんだな。アライバルね。

広末　（笑い）。

藤田　したところで……。

広末　到達したんじゃなくて、向こうへ行っちゃったんだよ。

藤田　そうそうそう。ボーフラみたいなもので、蚊になるまでの浮き沈みの……、まあ蚊になりかけたところとか、そういう感じでしょう。少し雑誌にもサービスしなきゃいけないからね。広末さんは江戸期の日本文学の、そこにだけ興味があるんじゃないにもかかわらず、アカデミックな世界というのは奇妙なものだね、そこの専門家の中の、いま老大家というふうにされてるわけよね。この定義は気に食わんわけだけど、周囲から、されている。気に食わんけどそうなってるという社会的現実は、実在と一致しなくても仕様がな

い。それは現象としてあるんだから……。その現象を……。少々サービスするとして、いまの江戸文学の研究者というのは、どんなもんですか。

広末　わかんないね。ほんとのこというと……。

藤田　だって、江戸ブームといわれているでしょう。日本の中では……。

広末　僕は、前にも言ったかもしらんけど、十何年か前に、やがて近世ブームがくるだろうと、書いたことがあるんですよね。近世というものは、神話のような原点思考みたいなものではやっていけない対象。そういう対象が問題になってくるときがくるだろうと。そうして、僕の予想通りというか、近世ブームは来たけども、その内容は僕の予想とは全く違うものであって……。もちろんアカデミックというか、学界むけの研究はそれなりにありますよ……。

藤田　まあ、これは論外にしましょう。

広末　それから、比較的一般に読まれるというのか、流通しているものというのは、なんかやっぱり、浮遊してるというんじゃなくて、浮かれてる、はしゃいでる、という感じね。金あまり時代の現象というか、いずれ伸びきったゴムのようになるかもしれないけど、いままでのシリアスというか、一義的というか、そういうものに対する一つのアンチテーゼとして、その浮かれたものが、変に斬新に見えるみたいな錯覚があって、目下、商品として流通している。しかし、こういうことを言えば、お前さんがもう動脈硬化してるからだと言われるに決まってるから、もう、こういうところでしか言わない。

藤田　浮遊と浮かれの違い……。

広末　浮遊してるというのは、さっきの迷ってるという……。

藤田　さっきの無名性というのが――キザで厭だったら――逆にいって有名性の拒否と言ってもいいわけね。有名性の拒否と有名願望みたいなものとがあって、浮かれ派というのは、その時その時、有名願望に突き動かされて、どうやったら有名願望を少し満たすことができるかみたいな、そういう心の傾きがあるんじゃない。

広末　そういうことをいうでしょう、ところが、それがなぜいけないんですかという……。

藤田　だから、いけないと言わないで、自由なんだけれども、違和感はあるよね。有名をお断りというか、有名性というのと無縁になった者から見れば、いけないとは言わんけど、違うよね。

広末　違う。大著を成して、ライフワークをつくってるやつの方が、まだいいんじゃないかというふうに見えたりするんだね。

藤田　重厚に見えたりするからね。

広末　どっちにいっても、こっちはもう谷底みたいなとこにいるわけだ。

藤田　だから、広末さんの悲劇的なというか、喜劇的な面というか、そういう一つの……、お気の毒に思うのは、その浮かれ派の人が大概、近藤忠義先生を担いだりして浮かれることは、まずないですよ。ところが、浮かれ派の人達はしばしば広末保を担いで浮かれるわけよ。

広末　なんでかなあ……。

藤田　いやいや、それを聞きたいのよ。広末さんは有名願望と無

縁になったことによって、『近松序説』以後の別の新しい世界を――つまり広末保の自己実現なんていうのは人間にありえないわけだから、言葉をやかましく言えばそういうんじゃないんだけど、まあまあ一応とにかく広末保になった――つくったわけでしょう。

広末　無理してね……（笑い）。

藤田　それが浮かれ派に使われるとは、ご本人は予測しなかったわけよね。ところが、浮かれ派が広末保によればって言いながら、その通りでこの通りだろうという。そのこの通りだろうという時は、ご本人の方へ引きつけられて、歪曲された広末保というのが、この頃は世間の流通貨幣の中へ……。千円札に刷り込まれてるわけだ（笑い）。

広末　いや、それはちょっと藤田さんの……。広末によればというようにやらないのが、浮かれ派なんですよ。

藤田　いや、だけど見る人間から見れば、例えば僕でさえ判る場合がしばしばあるわけね。あっ、これは広末さんのあそこを使ってるという……。だけど、有名願望に突き動かされてる人は、あんまり使わないわけ……。

広末　僕は無名……、要するに有名的じゃないから、したがって無断引用可能な相手ですよ。要するに、それはどこかで、誰が言ってもかまわないようなかたちで言ってるわけで。だから気楽に、何の抵抗感もなく……。

藤田　自由にどうぞお使いくださいと言ってるわけでしょ。それで使ってくれてるわけよ。

広末　そうそう。

藤田　その使われ方が気に食わんはずなのよね。

広末　はずなのね。

藤田　（笑い）。だから、そこのところを……。

広末　それはもう仕様がないんだなあ……。

藤田　仕様がないね。だから「南海先生独り酒を飲むのみ」……。何をか言わんやという……。自由なんだから悪いとは言えないものね。だけど違うなあという……。

広末　だから、黙しているしかないわけで。それは、もはや喜劇とか悲劇とか、そういうもんじゃない……。

藤田　てんごう書き的よね、非常に。

広末　僕に限らずね。

藤田　おもしろい現象よね。しかし、考えてみると、文学運動を……、文学運動なんて仰々しい言い方じゃなくても、とにかくてんごう書き的文学なり、ものの書き方なりを、表現した広末さんにしてみれば、だいたい世の中というものは、こういうもんだよというわけにもいかんよね。

広末　それはいかんね。

藤田　（笑い）。

広末　だから、おそらく僕は夢の中で道に迷って……。

藤田　そうでしょう。

広末　僕には完結志向はないから……。ないということは、逆に言ったら、道に迷う夢をみなくてもいいんだが、ところが、なんとなく行く手に何か思いがけないことが起こってきて……。全然予期しない方向で、それが……。

藤田　その成果が使われちゃったわけだ。使われてるわけだ。おもしろいね。

広末　だから、僕はちょっと往生際が悪いわけ。

藤田　うん、往生してないんだね。際が悪いなんてものじゃない。まるで往生できてない。折角やった成果は、別の方向に使われてるわけよね。紙幣に刷りこまれるかたちで、百円札か千円札かしらんけどさ……（笑い）。これはかなわんね。紙幣だから方々にあるわけね。それで肖像権を放棄してるもんだから、文句を言えないでしょう。文句を言うつもりもないでしょう。

広末　言えば、自分のやり方を否定することになるからね。ただ、僕は微かな期待がないわけでもないけどね。もうちょっと時代が変わるんじゃないかという気は……。

藤田　もう一回変われば……。僕は確実に変わると思う。確実に変わるけど、その時は手遅れだ。

広末　（笑い）。

藤田　つまり、文学というのは、今後ありうるかという問題があって。そして、ありうるとしたら、いままでいう文学というようなものは、ほとんどないんじゃないかなあ……。詩的なる何ものか、ほんとの断片中の断片が文学として将来残っていく。そういうトコトンまでいった時に、大きく変わるという予感がしてるんですけどね。これは予感だから、勝手なんですけど……。それで広末さんは七十になるんですから……、まだ、なってないんですか？　なるんでしょう。

広末　今日いく日だっけ？　十二日。もうあと、六日で……。

藤田　七十になる。広末さんが関係した文学運動だって、要するに建物はビルディングになったけども、中身はもうないわけ。だから、もう関係ないでしょう。そして法政も辞めた。法政の輝ける日文科の伝統、近藤忠義さんというのは、僕は大した学者じゃないと思うけども、あの時代にしては、それなりに一生懸命やったでしょう。それは評価せざるをえんわけ。

広末　戦前はね。

藤田　評価せざるをえない面があるでしょう。その輝ける日文科の中で、広末さんが開拓した……。エネルギーは法政以外にあったにしても、それを持ち込んだことは、大きな功績の一つだと思うよ。だから仲介役をせざるをえないような羽目になってるわけで……。とにかく、誰ともある意味で距離のあるというか、異質な存在になってたわけでしょう。そういう異質的実存になったというのは、やっぱりアカデミックな組織体に馴染まない考え方を持ち込んでくれたからでしょう。それで広末さんは、どっちに対しても、もう関係なくなったというところへきたと思うね。そこへまた江戸文学ブームで浮かれてる、浮かれ方に対しては当然厭になるわけね。ところが、それにある種の表現上の材料を与えてるわけね。つまり、材料の供給源になっちゃったわけ、意図に反して……。これが現状なんだけど、もしここで、広末さんがいま七十でなくて、例えば四十だったとすると、そうした時にこれからどういうものを……。

広末　それは難しいね。僕はジャーナリズムが変わったと思うんですね。ジャーナリズムというのが、今後ある程度媒介にならないと、やれないとこがあるでしょう。ところが、ジャーナリズムでの

流通の仕方がね……。昔は例えば何人かの人間が――これは古い保守的な言い方だけれども――あいつは能力があるとか、あいつはいいセンスを持ってるとかっていうのね。つまり評価する、認めるという時、それはだいたい当たっていて、それはそれなりに仕事をする人間だった。この頃は、そこにいる存在として、こいつはやれるやつだとか、できるやつだとかいう評価は、全然流通性がないんですね。要するにジャーナリズムの欲してるものに、うまく対応するようにものを書くというか、おしゃべりできるというのでないと、やれないわけ。そうすると、僕はやっぱり、それと戦う気力はないね。もし、四十であれば、少しでも可能性のある人間と集まって、学派というような大袈裟なものじゃないけども、そこに何かちっちゃな拠点をつくって、そして何か蓄積していくというか、そういうことをやりたいね。いまでも時々、元気になると、何人かの人間で、つまり討議しながら蓄積しようと……。そういう場が欲しいと思うことはいまでもあるね。ただ、そういうものを組織するエネルギーが僕にはないから、誰かがそういうことを始めれば、若い人が……。もちろん状況は睨んでいるにしても、その状況とは距離を置いて、そして彼らが、若い彼らが、十年後に何かのかたちをつかめるというふうな準備をしていく。そういうことは、やってみたいという気持ちは、時々起こるんですよ。ただ、現状はなかなかそう甘くなくてね。

藤田　国際的に広げた場合はどうですか？　僕も、僕の仕事はバトンタッチだというふうに、一応の定義というか規定というか、そういうような……。日本人にも何人かバトンタッチしたいという……。だけど、なにしろ貧困ね。偉そうに人材の貧困などというつもりはさらさらありませんけど、なにしろ貧困だわ、日本は。いままで、例えばアメリカ人ならアメリカ人、アメリカのユダヤ人、アジア人の中にまだ一人二人いた。在日朝鮮人の中に一人二人いた。こういう人にもし、何かお役に立てばと思ってるだけです。もし、それにバトンタッチすれば……。するものがあるならば……。つまり先方の自由なんだけど、全くそういうところへいきましたね。拠点を仮につくってみても……。勉強会みたいなもので、僕は何回かやってみたんですけど……。そういうものは一定の期間、十年も続けばいいもので、それで終わりが来ていいんですけど、それが貯まっていかないのね。全部散っちゃって……、みんなが散っていくのはいいんだけど、ご本人が散っちゃってね（笑い）。雲散霧消というやつで……。雲散霧消時代。その雲散霧消の大きな媒介が、おっしゃるジャーナリズムの……。雲散霧消さしちゃうんでしょう。

広末　そうそう。

藤田　世の中に向かって霧を吹いてるような感じでね。

広末　何を言ってもひかれ者の小唄みたいになってしまうからね。もし、仮にあと五年も生きられるとすれば……、しかし、頭が、まあ持たないと思うけれど、もし持ったとして、実際かたちの上ではそういう場ができなくても、精神的な関係として……。ただ、日本人の場合は、とかく対立すると別れちゃうんですね。近いから対立するわけでしょう。だから、身近に対立できる関係を発見せんといかんわけよね。せめてそういう土壌を……。初めから対立しない人間、擦れ違いの人間が多いわけでしょう。フランクフルト

学派の歴史なんかみてると、すごく羨ましいね。実際のことはよく知らないけど、ベンヤミンだとかアドルノとか、いろんな違うのがいて、それがお互いに批判しながら、ときには確執しあいながら、ある大きな流れをつくっているわけでしょう。そういう関係ができない。あれは、しかしやっぱり状況ってあるのかな？　ユダヤの問題もあるみたいだけど、やっぱりあそこを拠点にしなければならなかった状況があった。日本の場合は、アメリカなんかとも違うと思うんだけれども、アメリカは繁栄してるかもしれないけども、もうちょっと日本よりは浮かれることができない状況もあるんじゃないかという気がする。

藤田　アメリカの主流は、いま物凄いアカデミズムのゴチゴチね。大学の中で出世するという……、それでしょう。だけど、そうじゃない少数派がたくさんでてきたね。三十代、四十代にでてきましたね。インド人であったり、インドの詩人であったり、日系三世の小説家であったり……。ほんとに新しい小説ね。それからアラブ人であったり、そういうのが……。やっぱり単一民族じゃないから、世界中から集まってるから、いろんなのがでてきたね。新しい世界に……。アメリカの大勢は変わらないにしても……。大勢が変わるというのは、結局は変わった少数派が世界中で食い違いながらつながりあっていくと、変わっちゃうわけだね。そのへんの可能性は、日本が一番少ないことは間違いないね。

広末　貿易黒字国であるかぎりは、少数派というのが……。活きのいい少数派で残れないんじゃないかなあ……。

藤田　そうすると、てんごう書き的精神が実現することは、まずないですね。

広末　ある時期、例えばアングラ劇場など既成の言葉とか表現ではできない、つまり声にならないもの、少数の、声にならないものと交流しようという動きはあった。しかし、その中の大部分は有名性を求めておったんですね。結局パフォーマンスの運動みたいなものも、なしくずしに商品化されていった。それはさらった方に力があったともいえるけども、さらわれる方が……。

藤田　脆弱だった。

広末　どこまで本気であったのかという問題もあるんですよね。そういう時期もちょっとあったような気がするんだけど、どうも結果的にみると、ほとんどがさらわれていった。表現の自由とか、それは重要だけど、何を言ってもおもしろければ商品になるという意味の自由でもあって、それをマスコミがうまく探る。そうすると、何か器用な芸を一つ持っていればよい。何を言いたいのか、何を言わねばならないかという前に芸を身に付けちゃう。昔はよく眼高手低といって批判したでしょう。逆ですね、今は。意味を少しずらせて言えば眼高手低でいいじゃないかという気さえしだしたね。

藤田　だから書かない……。

広末　眼低手高の賑わいですよ。

藤田　僕なんか、手がなくなってきた（笑い）。

広末　眼高というのもあんまりいないかもしれないけど、ともかく、手が届かないでじたばたしてる方が、まだいい。励ましがいがまだある。手ばかり上の方で振りまわしてね……。

藤田　もっとも、ワープロだから、手もあんまりいらんのじゃな

い……（笑い）。

広末　僕は、もうちょっとみんな眼高手低になって、書くにも書きようがないとか、そういう状態に、もう一度なった方がいいような気がするな。実に、うまいですよ。若い人なんか論文を書いても、論文の書き方というのがあって、あっ、こういうふうにすると論文になるんだとか、こういう単語をちりばめれば論文になるのかなあと思うような論文が、ジャンジャカ出てくるんですよ。洒落たつもりで野暮くさいと言えばそれまでだが、この頃はもう、恐れをなしちゃって、こっちは同じ単語を使いたくても使えなくなってくる。やんわり書くしか手がなくなってくる。とにかく、芸達者になっていますね。まあ、芸がないのよりは、芸達者の方がいいかもしらんけども……。

藤田　いや、よくないよ。使用価値の極限形態やな。何でも使えるものは使うと……。それで使った者が勝ちだ。ものは使用価値のために、使用価値としてしか存在していないのであって、ものそれ自体というのはないんだという考え方でしょう。だから困るよね、そうなったらね。

広末　そう思ってるんだよ、実際に。気が付かないんじゃなくて、そう思って、それをどううまく泳いでいくかということを早くから身に付けるのよね。

藤田　だから、非常にある種の図々しさがあるでしょう。含羞の精神が……。

広末　羞恥心がなくなってるのね。だから、話してても、こっちが顔を赤らめちゃって、ものが言えなくなってくるのね。そういうことが多いですね。

藤田　自分も使用価値でいいじゃないか、何を言うんだという……。

広末　はっきり言うものね。大学院の学生なんかもね、そういうのがいる。売れるように早くなりたいと、真面目な顔をして言うんだから……。冗談で言ってるんじゃないのね。それが美徳だと思ってるんだから、なんだか寒い感じがしますね。そういうふうに賑やかにやってるから、回りの空気が暖かいかというと、そうじゃなくて、浮かれて騒いで賑やかにやってるけども、空気は寒々としている。それでこちらは風邪ばかり引くんだな。風邪を引いて、すぐ寝込んでしまう。目が覚めると猫と遊んでる。猫が一匹いるだけでも、家の中の空間のイメージが変わってくるんだね。

藤田　広末さん、内田百閒のように『ノラや』みたいなの書いたら……。

広末　霊的な感じがするねえ、魔的な感じ……。嫌いだったけども、なんか憑かれちゃったかな。ちょっと話は飛びますけども、僕は子供を養ったことがないでしょう。その猫は、生まれて二週間目に貰ってきたんですよね。二週間目って、まだ親から放しちゃいけないらしいんだよ。

藤田　死ぬかもしれないんでしょう。

広末　それで一生懸命、便を出すためにマッサージしてやったり、便秘になってきたら医者へ行ったり、母親の代わりを全部した。ティッシュペーパーで、こうやって摩ってやったり、哺乳瓶で飲ませてやったり……。だから子供を育てたみたいで、一ヶ月たっ

た時にほっとした。やっと生きられたという……。向こうはケロッとしてる。そんなの全然知ったことではないという顔をしてるけど、なんか子供を養ったという……。子供を養うということは、どういうことですかね。

藤田　人間外のものに興味がいったというのはおもしろい。僕はこれから――おそらく書かないと思うけど――書くとしたら、自然哲学批判という題で書いてみたいという気はある。文学なら文学の上で、もう一回大きな変動がくるという――おそらくそうだろうと思いますけど――その時は、もう文学がなくなるのか、ありうるとしたら、やっぱり人間を外から見るというか、人間の外へ行って、そして、猫でもいいし、どこかの動物、植物でも、すべてと付き合ったあげくの果てに、人間にしかないものというのを、もう一回再発見するかたちで、再評価するかたちで注目して、ある種の愛情を人間に対してとにかくもう一回持つという、その経過を経ないと、本質的には出てこない気がする。

広末　僕は人間に対する愛情というものを、観念的にはかなり……。

藤田　深く感じたでしょう。もともとは……。

広末　うん。しかし、だんだん人間嫌いになってきて、それは自己嫌悪の裏返し。僕は猫を育てて、物凄く優しくなったの。猫って、ほんとにすべて人間に依存してるのよ。僕が面倒をみてやらないと死ぬかもしれないんだな。そうすると、無償の気持ちで僕も可愛がるんだね。生きものが物凄く可愛くなってきたね。少し人間にも優しくなったみたい。家の者に、俺、この頃少し優しくなったんじゃないかって言うんだけど、なかなかうんとは言わないけど……、猫を通して、人間でないものを通して、人間に対して少し優しさがでてきた。優しくなって、さて外に出てみると、気に入らない人間がいっぱいいるという……。

藤田　無表情な現実がございまして……。

広末　そこがどうにも……。そしたらまた、猫に帰るしかなくなっちゃうんだよ。

藤田　いまぐらい表情というのを失った現実というのは、ないんじゃないかな。だから、リアリズムの存在しようすべもないわね。したがって、シュールリアリズムも到底、存在できない。ほんとに奇妙なところへいったね。要するに、生命の現象形態をとにかく何かつかまないと、そこを経過しないと……。

広末　猫の方は、まだ生命の実体が……。

藤田　あるわけよね。

広末　感じるんだよね。

藤田　人間といっても、特に日本でしょうけどね。――まだ時間があるんですか？

――はい、いま、だいたい一時間半。

広末　だいぶ、しゃべってはいけないこともしゃべってるからね。いくらなんでも……。

藤田　かまわんでしょう。

広末　藤田さんとの対談なんて、編集部が認めたこと自体に、編集部の誤算があったということだ（笑い）。

――犬じゃなくて、猫ですか？

広末　マンションだから、犬は飼えないんです。猫も飼っちゃいけないかもしれないが、猫は出さないからね。我が家の猫は、生きものというのは、人間しか知らない。だから、われわれを全く同族だと思ってる……。

藤田　かわいそうといえば、かわいそう……。

広末　かわいそうなんだ。母親から非常に早く引き離しちゃったし、それ以来、家の中にいるものしか、生きてるものを知らない。それだけに余計、僕もあらゆるものを代行してやってやらにゃいかん。

藤田　猫と同朋になったのね。

広末　そう。猫は自分が人間だと思ってるんじゃないかと言う人がいるけれど、猫は僕のことを猫だと思ってるんじゃないか……（笑い）。

藤田　犬と猫はある意味で正反対だけど、人間の子供とやっぱり違います。人間の子供の方が憎らしくもあるということ……。

広末　そこはやっぱり対等に考えるから……。

藤田　……でしょうね。

広末　僕の場合は、下に見るというのじゃなくて、異次元のものだというのが、まずありますよね。全然通じていないかもしれないという……。通じないけど。

藤田　わかってる。また、わかるんですね。今度、コンラート・ローレンツの本を広末さんに一式、進呈しますか……。彼はおそらく一番たくさんの動物の言葉がわかる人でしょう。今年死んだんですけど、死ぬ前のインタビューで、ゴルバチョフのやろうとしていることを歓迎しますかと質問したら「うん少し。ただし自分は熱狂しない。なぜならば幻滅するのが嫌いだから」と言って……。我々はああいうふうにうまくは言えないけど、熱狂することはないでしょうね。ただそれを経過して、ちょっと……。社会の大勢が変化するためには、日本が没落する以外にないでしょう。そして没落は必ず来る。この経済帝国主義大系は必ず没落する。遠からず来る。時間はわからないですけど……。八月十五日みたいに、調印式をやるわけじゃないから、ジワジワ来るわけですからね。今度は経済戦争で成功したけども、成功した瞬間に敗北が始まっていて、それで敗北する。敗北しなければわからないという社会だなあ……。これも奇妙な特徴ね。外から敗北させられなければ、気が付かない……。

広末　かつての敗北の仕方もまずかったしね。

藤田　文学精神の基本には、さっきの無名性とか、有名性の拒否とかっていうのがありましたけども、それをもっと一般的な言葉でいうと、敗残者っていう……。俺は人生の敗残者だっていうのが、ある核心のところにあったでしょう。病気であったり……。

広末　核心というか、さっき言ったけども、つまり俺にはもう、それしかないんだという、芭蕉のようにこの一筋につながるという、そういう強いものじゃなくて……。我々の時代は、政治家にもなれないし、実業家にもなれないし、身体も弱いし、そっと隅の方で生かしておいて欲しいというところから始まったね。

藤田　無能にして、この一筋じゃなくて、無能それ自体という意識ですか？

広末　そういうわけです。ところが、いまは違うのね。例えば文

学をやると、国文学をやっても、若い時にいわゆる業績なるものを出せば、必ず出世するんだよ。大したことはないけど、どこかの大学の教師にどんどん、なっていくわけね。僕なんかの時には、文学部へ行ったら食えなくなるということが前提にあったけど、それがない、全然……。だから、それなりの出世コースが、ちゃんとあって、それに向かって鋭意努力してる、勉学に励んでるわけでしょう。僕らがそういうことを言うと、なんか昔の私小説の作家みたいな、破滅型みたいなふうに取られるけど、そういう意味ではなくて、見てると、何で文学やるのかというのが、よくわからなくなってくるんで……。どういうのかな、文学研究というのが、ものを解釈するというか、解読するというのか……。文学の構造を解釈するということが文学の研究であって、で、うまく解釈できるかどうか、そこのところに情熱が傾けられるんですね。その前に、なんでその作品を読むのかという……、それがないわけね。だから、非常に自然科学なんかに似てるのかなあ……。

藤田　自然科学にもよりけりよ。ですけど技術方面は似てますよねえ。

広末　似てるね。

藤田　まあ、技術優先ですよね。技術が同時に、口過ぎ身過ぎと社会的地位と直結してるからね。

広末　それで解釈がうまくできると、あるいは自分で思ってる図式にはまると、だからその作品は存在理由があるというふうになるんですね。構造主義的な論理で解読できると、だからこれは存在理由があって、いまもなおかつあるんだということになってしまう。解読できるということと、それをどう批評するかということが一つに結びつかない。だから、これをやって、次はこの材料、次はこの材料って、無限に材料はあるわけ。材料は無限にあるから、いつまでたってもスランプができるということはないね。仕事はもう、永遠にできるね。

藤田　幸いにして、人間の一生は短いからね。

広末　まあ退屈することないんじゃないかな。少なくとも研究者は退屈してないね。僕ら、退屈で退屈で堪らないから、小説なんか読んでいたというふしもあるんだけれども……。いまの人はほんとに退屈してないんだよね。時間は足りない、半分肉体労働みたいなものでね。まあ、ポンポンしゃべって、こういうことを若い人が読めば、なんという骨董品的人間が……（笑い）、まだ存在するだろうかと思って慨嘆するでしょうね。

藤田　私たちは、退屈な敗残者です。にもかかわらず、ちっとも後悔などしていません。悔い改めることのない迷路です。――というわけで。